



初夢の多感肉感臨場感
 やたら手を洗ふ年末賞与の日
 張り切つて老いてゆくなり初明り
 海嘯のすさぶを統ぶる冬銀河
 霜折や獣の臭ひふいに吾に
 引き揚げし時の刻まる黒マント
 花の内上手な転び方習ふ
 若水を汲みては薔薇のごときもの
 寒鯉に御神酒吞ませて厄払
 冬紅葉人を待めば哀しみも
 あけもどろのおもろの初日仰ぎけり
 灯台は津波の墓表磯千鳥
 山育ち海鮮雑煮好きになり

*

小林貴子
 国見敏子
 堤保徳
 大野今朝子
 五味真穂
 唐澤南海子
 田中純子
 柏田浪雅
 沖田泰子
 山崎妙子
 上江洲萬三郎
 塚原白里
 細川すみ子
 北見弟花
 高木忠雄

聖夜なりゲノム編集てふニュース
 筑波嶺や足が手となる蓮根掘
 たわいなき仕事を孜々と年用意
 狐来よ兎も来よとほんやら洞
 凍鶴の身を絞るごと佇ちつくす
 もこもこのスリッパ木菟の鳴く夜かな
 あいまいな心極上恵方巻
 考妣と御神酒を干せるお元日
 コンビニの三十日蕎麦食ふ為^{ていたら}体
 焚火の輪五郎金時こぼこぼす
 懸の魚一膳めし屋混んでをり
 寒卵^幼き頃^の宝^物
 今立てし引き戸の音も初昔

*

松本京子
 広瀬西山
 林春子
 木村由里子
 横地妙子
 塩川昭子
 内堀紀香子
 千田幸子
 日立早
 梶原夢乃
 垣内みか
 中澤清治
 阿部萌子
 松崎響亮
 齋藤元紀

エンタシスなせる柱や四方拜
 正月に雪が茶色は先暗し

岳・見えたるひかり 三月

(475)

宮坂 静生

——同人集・岳集・青雲集から

はじめに。日常詠ではテーマ（主題）を持つことはむずかしい。が、特別作品の応募などでテーマを定めることは、ふだんの作句とは違う意識をかき立てることになる。

初夢の存在感をへものにする

初夢 多感 肉感 臨場感 小林 貴子
初夢詠は淡い句が多い。掲句は「肉感」の指摘が鋭い。交接感。「多感」も「臨場感」もイメージと調子を整えることば。初夢をへものにした一句として珍重したい。

やたら手を洗ふ年末賞与の日 国見 敏子

渡す方ではなく貰う方。女性のそわそわ落ち着かない状態を「手を洗ふ」（洗面所）の端的な行為で捉えたところが、ベテランにしているういしい。枯れた句を作らないのが見識。

張り切つて老いてゆくなり初明り 堤 保徳

保徳さんも八十歳とうかがい驚く。身体も感覚も思考も老いを知らない。多力者。柔軟さを失わない。それが「張り切つて」の中味。天然自然の「初明り」にも力がある。「寝正月」などと俳諧へ落さなかったよさはいうまでもない。

寒鯉に御神酒吞ませて厄払 沖田 泰子

厄払、厄除の供えものの寒鯉。大役をはたす寒鯉の貫禄があざやかに描かれている。富山の風土のゆたかさが伝わる。

冬紅葉人をためば哀しみも 山崎 妙子

人に対しても、完璧を期待してしまうもの。誰にもいえない思いの究極はかなしみとなって耐える以外にない。冬紅葉を取り合わせた思慮深さが伝わる。

あけもどろのおもろの初日仰ぎけり 上江洲 萬三郎

「あけもどろ」とは沖繩の日の出の風景の美しさの称とか。

今月の秀句

霜折や獣の臭ひふいに吾に 五味 真穂

吾から獣の匂いがしたという句は、ないわけではない。が、土俗的な天候具合の霜折（朝のうち強霜のため曇天）との取り合わせにより、獣の匂いがいっそう野性味をもつて感じられるのがおもしろい。真穂さんの住居は八ヶ岳山麓標高一〇〇〇メートルの乙事。人間と獣とが共存するぎりぎりの地。縄文好きの私には魅力ある地。ようやく、風土を肌身で受けとめる大胆さがこの作者に出てきたことを飲みたい。

海嘯のすさぶを統ぶる冬銀河 大野今朝子

津波に伴う海鳴りの荒れ狂う一切を統べている冬銀河。荒涼たる大海原の冬の宇宙を寸分の隙なく描く。緊迫感が巧み。

引き揚げし時の刻まる黒マント 唐澤南海子

満州など大陸からの引揚げ詠。「黒マント」の物体感がすべて。瀟洒とはいえない隠微さが漂い、激動の歴史をひとと感じさせる。抑留体験や満州国の興亡体験など、いまだ詠まれない暗部はたくさんあろう。

花の内上手な転び方習ふ 田中 純子

松の内が過ぎ、一月は後半が花の内。みちのくの正月。高齢化社会になると「転び方」までプラチナ大学などで学ぶ。中には臨死体験までやってみましようという。そのまゝ逝ってしまわないように。ともかくなににごとも体験は大事。

若水を汲みては薔薇のごときもの 柏田 浪雅

方円の器に入った珠のごとき若水を「薔薇」に喩えた明るさが巧み。直喩に飛躍がある。微妙さを気にしないで大胆に薔薇の華やぎを提示したことばへの賭けを私は評価したい。

地貌季語ばかりでなく、地域の方言などには曖昧さが美しいことばが多い。語源などを聞くと納得させられる。

灯台は津波の墓表磯千鳥 塚原 白里

白里さんは息の長い作者。いつか九十歳と長老。隙のない堂々たる房州詠を出される。母堂の常田深雪さんの気風のよさを思うことしきりだ。

山育ち海鮮雑煮好きになり 細川すみ子

「海鮮雑煮」とはどんな海のものを入れるのか。海のゆたかさは山とは違い、見える処のものばかりでないのが魅力。

他に推薦候補作を記す。

身の内新たな地層枯木星 岩井かりん
セーターに首出すまでの妬心かな 金子 圭子
深雪より枝のとび出す林檎園 窪田 英治

ゲノム編集とは神にたてつく行為

聖夜なりゲノム編集でふニュース 松本 京子

神の子キリストの降誕を記念する夜に神を冒瀆する染色体組み換えのニュースが話題になる。人間社会のめちやくちな現況を指摘し、この先どこまで突き進むのか、不安感を掻き立てた作。情緒よりもものの実体を捉える意欲作である。

拓くじつば ⑤ 自句寸言③④「鳥渡る」

翻車魚の揚がる港の月夜かな 平成九年

「岳」（平成九年十一月号）所載。常陸の港に翻車魚が揚ったという記事からの着想。筑波山麓の加藤慶二郎を訪ねたことから常陸への関心が童画風に膨らんだもの。好きな句でしばしば揮毫した。『山の牧』所収。

蓼虫はさすらひのいま中途にて 平成九年

「岳」（同上）。自画像風にふと着想したもの。「死にがたしとて蓼虫のあつまれる」（『山開』）と蓼虫への関心がある。よれよれの蓼からときどき顔を出し世をちらっと見る虫の剽軽さがなかなかいい。『山の牧』所収。

亡きひととしばらく歩む渡り鳥 平成九年

「岳」（同上）。「小諸市石峠 龍野咲人」と前書。詩誌「オルフェ」同人の詩人。小説「火山灰の道」で近代文学賞受賞。詩集『樹液』ほか随筆集『信濃の旅情』など山住みの深い思索を透明な文章で書かれた名著がある。私が編集をしていた俳誌「龍膽」に散文をしばしば貰った。親交を深めた詩人のおひとり。本誌会員内堀紀香子

の父。

掲句は先生の死後、東信「岳」総会の後、浅間山麓石峠の家へ弔問にあがった平成九年九月二十一日の作。

「割りかけの鳥の胡桃詩人亡し」が同時作。温和な繊細な文人で、俳句へ愛情を注いでくださった。懐かしい人である。『山の牧』所収。

はらわたの熱きを待み鳥渡る 平成九年

「岳」（平成九年十二月号）所載。初出。以後各誌に出る。平成九年九月二十二、三日と北信の松川溪谷から志賀高原の熊の湯へ抜ける途中の山田牧場を散策。そこでの囁目吟。溪山亭で句会。中島畦雨、小林貴子、折井眞琴など参加七十二人。長野勢が盛ん。画期的な吟行会であった印象が今も鮮明だ。

午後、霧が出始め、小雨模様。大ぶりの渡り鳥が五六羽、南へ渡る光景を見た。視野にはわずかの時間であったが、その必死の飛翔が「はらわたの熱きを待み」とすらすと出た。損得をあてにする「頼む」ではない。自身に待む以外にないぎりぎりの生存を讃えた。三千里の彼方から来て、また春には帰る渡り鳥が持つ逞しさに人は敵わない。『山の牧』所収。

山の端の裏の爆発冬落暉 高木 忠雄

私の住む山国松本平の盆地はまさにこれ。冬日は飛驒山脈に落ちる。山の稜線が染まり宙が燃えるさまは天変地異を思わせる。家からとび出し、思わず天を仰ぐ。荘厳などとおざなりにいい得ないすさまじさを感じる。「爆発」の語がそれをいい止めている。天空が壊れないのが不思議。はじめての投句者。どの句もバランス感覚がいい。

筑波嶺や足が手となる蓮根掘 広瀬 西山

蓮根を足でさぐりながら掘り上げる。「足が手となる」が即物的ない方で、上手ではないが、泥との格闘の蓮根掘だけに、かえっておかしさもあろう。向うに筑波嶺がぼつぼつ笑う頃か。構図もわるくない。

たわいなき仕事を孜々と年用意 林 春子

新年を迎える年用意とはいえ、さしたる事があるわけではない。それでもちまちまと、懸命にやっている。主婦が自分の日常へ目を向け「たわいなき仕事」と捉えたのがいい。

狐来よ兎も来よとほんやら洞 木村由里子

新潟県魚沼辺の小正月に雪中につくられるかまくら。「ほんやら洞」のひびきが懐かしい。思わず、民話の語り「狐来よ兎来よ」の調子が現にくりひろげられる宴が彷彿する。

凍鶴の身を絞るごと佇ちつくす 横地 妙子

釧路湿原の凍鶴。「身を絞るごと」にその細身の芯の勁さが描き出されている。凍ては鶴の身にあってもかなしみであろうか。なにを考え、なにを愉しみに佇ちつくすのか聞きたい。

もこもこのスリッパ木菟の鳴く夜かな 塩川 昭子

スリッパなど卑近なものの感触から木菟の鳴く夜を連想したわかり易さがおかしい。新しいお話風なスナップ。

あいまいな心極上恵方巻 内堀紀香子

恵方巻とは、妙な食物がはやり出したもの。その年の恵方を向いて食べるとか。「あいまいな心極上」のわかったようなわからない「あいまいさ」が恵方巻によく合う。巧み。

考妣と御神酒を干せるお元日 千田 幸子

亡き父母と元日の祝酒を口にするという親孝行この上ない思いにうたれた。かつて山田洋次監督の同じテーマの映画に感銘したことを思い出す。「干せる」の用語も効いている。

コンビニの三十日蕎麦食ふ為体 日立 早

簡便この上ない。みそか蕎麦までコンビニ利用とはと、暮しの安易さに気がひける思いが「為体」の下五音となった。一句の文体の軽快さが句の内容と適度に釣り合っている。

焚火の輪五郎金時こぼこぼす 梶原 夢乃

「五郎金時」は石川県のさつま芋とか。「こぼこぼ」は「ほ

くほく」と似た感触か。方言がおもしろい。口の中に残るような響きであるが、ごそごそではない。温かみがある。

懸の魚一膳めし屋混んでをり 垣内 みか
四万十市在住の作者。懸の魚とは正月用の懸け魚。幸木ともいう。四国の正月の気軽な一膳めし屋が一読明瞭。偷しい。

寒卵 幼き頃の宝物 中澤 清治

波郷の句〈寒卵薔薇色させる朝ありぬ〉ではないが、薔薇色させる寒卵。それが宝物とは涙が滲むほど懐かしい。兄妹でだれが食べるか譲り合い、割ってしまったりして。飽食以前の戦後の感触こそ新鮮。食に対して感動を失った現代はや

今月の秀句

限界集落そこに立ちたるサンピラー 北見 弟花

「サンピラー」はダイヤモンドダスト。作者は旭川に近い北海道比布在住。「限界集落」は高齢化で、人口の半分以上が六十五歳以上。冠婚葬祭など集落の行事が維持できなくなり、人間らしい暮らしの危機状況にある村落をいう。「岳」ではすでに承知の用語であるが、自然の美しさが格別とは、なんとも切ない。事象だけを端的に提示した句であるが、そこに力がある。饒舌を拒否した俳句形式のもつ迫力であろう。

はり変なのではないか。素朴大切。

今立てし引き戸の音も初昔 阿部 萌子
とんと引き戸の音。次の瞬間にはそれが昔になるとは。繊細この上ない日本人の正月感覚に気付く。

岳集推薦候補作を掲げる。

捨てられし墓石の山に冬怒濤	佐藤 詔子
初夢やものの始まりビッグバン	宮地 良彦
失せし者還ることなし摩文仁冬	上脇 邦子
樫や我が魂の強くあれ	西澤日出樹
抗はねば古い放題や冬薄	鈴木 春子

青雲集―投句をおすすめ

エンタシスなせる柱や四方拜 松崎 響亮

名を変え本誌再入会ということでごくに登場。本来新人欄にはふさわしくない人だが、上記の事情で取り上げた。巧い。大寺（たとえば唐招提寺）で、中途が丸みをもった柱に囲まれている元旦の四方拜。気分昂揚この上ないと推察する。明快。

正月に雪が茶色は先暗し 齋藤 元紀

白骨温泉在住の作者にとり、正月に雪が少なく、地の色が滲むような半ば汚れた雪を見るのみとは。「先暗し」が鋭い。環境問題に取り組むプロ級の当人。一家言を持っている。